

# 大江山

楠山正雄

青空文庫



むかし源頼光みなもとらのらいこうという大將たいしょうがありました。その家来けらいに  
 わたなべのつな、うらべのすえたけ、  
 渡辺綱、卜部季武、碓井貞光、坂田公時さかたのきんときという  
 四人にんの強い武士つよぶしがいました。これが名高なだかい、「頼光らいこうの四天王てんのう」  
 でございます。

そのころ丹波たんばの大江山おおえやまに、酒呑童子しゆてんどうじと呼ばれた恐ろしい鬼おに  
 が住すんでいて、毎日まいにちのように都みやこの町まちへ出て来きては、方々ほうぼうの家いえ  
こどもの子供こどもをさらって行きました。そしてさんざん自分じぶんのそばにおい  
つかて使つかつて、用ようがなくなると食たべてしまいました。

するとある時、池田中納言という人の一人きりのお姫さまが急に見えなくなりました。中納言も奥方もびつくりして、死ぬほど悲しがつて、上手な占い者にたのんでみてもらいますと、やはり大江山の鬼に取られたということがわかりました。中納言はさつそく天子さまの御所へ上がつて、大事な娘が大江山の鬼に取られたことをくわしく申し上げて、どうぞ一日もはやく鬼を退治して、世間の親たちの難儀をお救い下さるようにとお願い申し上げました。

天子さまはたいそう気の毒に思し召して、

「だれか武士のうちに大江山の鬼を退治するものはないか。」と大臣におたずねになりました。すると大臣は、

「それは源氏の大将頼光と、それについております四天  
王の侍どもにかぎりませう。」

と申し上げました。天子さまは、

「なるほど頼光ならば、必ず大江山の鬼を退治して来るに相  
違ない。」

とおっしゃって、頼光をお呼び出しになりました。

頼光は天子さまのいいつけを伺いますと、すぐかしこまっ  
てうちへ帰りましたが、なにしろ相手は人間と違って、変化自  
在な鬼のことですから、大ぜい武士を連れて行って、力づくで勝  
とうとしても、鬼にうまく逃げられてしまつてはそれまでです。

なんでもこれは人数は少なくともよりぬきの強い武士ばかりで

で出かけて行って、力ちからづくよりは智恵ちえで勝かつ工夫くふうをしなければなりません。こう思おもつたので、頼光らいこうは家来けらいの四天王てんのうの外ほかには、一なばん仲なかのいい友達の平井保昌ひらいのほうしようだけをつれて行くことにしました。世間せけんではこの保昌ほうしようのことを四天王てんのうに並ならべて、一人武ひとりむ者しやといっていました。

それからこれは人間にんげんの力ちからだけには及およばない、神様かみさまのお力ちからをもお借かりしなければならぬというので、頼光らいこうと保昌ほうしようは男おとこやまはちまんぐうの八幡宮つなに、綱つなと公時きんときは住吉すみよしの明神みょうじんに、貞光さだみつと季武すえたけは熊野くまのの権現ごんげんにおまいりをして、めでたい武運ぶうんを祈いのりました。

さていよいよ大江山おおえやまへ向むけて立たつことにきめると、頼光らいこうは

じめ六人の武士はいずれも山伏の姿になつて、頭に兜巾をかぶり、篠掛を着ました。そして鎧や兜は笈の中にかくして、背中に背負つて、片手に金剛杖をつき、片手に珠数をもつて、脚絆の上に草鞋をはき、だれの目にも山の中を修行して歩く山伏としか見えないような姿にいでたちました。

## 二

六人の武士はいくつとなくけわしい山を越えて大江山のふもとに着きました。たまたまきこりに会えば道を聞き、鬼の岩屋のあるという千丈ガ岳を一すじに目ざして、谷をわたり、

峰<sup>みね</sup>を伝<sup>つた</sup>わつて、奥<sup>おく</sup>へ奥<sup>おく</sup>へとたどつて行きました。

だんだん深<sup>ふか</sup>く入<sup>はい</sup>つて行つて、まつくらな林<sup>はやし</sup>の中の、岩<sup>いわ</sup>ばかりの  
でこぼこした道<sup>みち</sup>をよじて行きますと、やがて大きな岩<sup>いわむろ</sup>室<sup>まへ</sup>の前に  
出ました。その中に小さな小屋<sup>こや</sup>をつくつて、三人<sup>にん</sup>のおじいさんが  
住<sup>す</sup>んでいました。頼<sup>らい</sup>光<sup>こう</sup>はこんな山<sup>やま</sup>奥<sup>おく</sup>で不思議<sup>ふしぎ</sup>だと思つて、こ  
れも鬼<sup>おに</sup>の化<sup>ば</sup>けたのではないかと油断<sup>ゆだん</sup>のない目<sup>め</sup>で見<sup>み</sup>ていますと、お  
じいさんたちはその様子<sup>ようす</sup>を覚<sup>さと</sup>つたとみえて、にこにこしながら、  
ていねいに頭<sup>あたま</sup>を下<sup>さ</sup>げて、

「わたくしどもは決<sup>けつ</sup>して変<sup>へん</sup>化<sup>げ</sup>でも、鬼<sup>おに</sup>の化<sup>ば</sup>けたのでもありません。  
ひとり<sup>ひとり</sup>は摂津<sup>せつづ</sup>の国<sup>くに</sup>から、ひとり<sup>ひとり</sup>は紀伊<sup>きい</sup>の国<sup>くに</sup>から、ひとり<sup>ひとり</sup>は京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>に近<sup>ちか</sup>い  
やまし<sup>やまし</sup>ろの国<sup>くに</sup>から来たものです。あの山の奥<sup>おく</sup>に住<sup>す</sup>む酒<sup>しゆ</sup>呑<sup>てん</sup>童<sup>どう</sup>子<sup>じ</sup>のた  
山城<sup>やまし</sup>の国<sup>くに</sup>から来たものです。あの山の奥<sup>おく</sup>に住<sup>す</sup>む酒<sup>しゆ</sup>呑<sup>てん</sup>童<sup>どう</sup>子<sup>じ</sup>のた

めに妻つまや子を取とられて残ざん念ねんでたまりません。どうかして敵かたきを取とりたいと思おもつて、ここまで上のぼつては来きましたが、わたくしどもの力ちからではどうすることもできませんから、ここにこうしてあなた方がたのおいでを待まちうけていました。山やま伏ぶしの姿すがたにやつしてはおいでになります、あなた方がたはきつと酒しゅ呑てん童子どうじを退たい治じするのために、京きやう都とからお下くだりになつた方々かたがたでしょう。さあ、これからわたくしどもがこの山の御案内ごあんないをいたしますから、どうぞあの鬼おにを退た治じして、わたくしどもの敵かたきをいっしよに討うつていただきとうござります。――

といたしました。

頼らい光こうはそれを聞きいてやつと安あん心しんしました。そしてしばらく

小屋の中に入って足の疲れをやすめました。その時三人のおじいさんは、

「あの鬼はたいそうお酒が好きで、名前まで酒呑童子といつております。好物のお酒を飲んで、酔い倒れますと、もう体が利かなくなつて、化けることも、にげることもできなくなりませぬ。わたくしどものこのお酒は、「神の方便鬼の毒酒」という不思議なお酒で、人間が飲めば体が軽くなつて力がましますが、鬼が飲めば体がしびれて、通力がなくなつてしまつて、切られども、つかれても、どうすることもできません。このお酒をあげますから、酒呑童子にすすめて酔いつぶした上、首尾よく鬼の首を切つて下さい。」

といつて、お酒さけのかめをわたししました。

それから三人にんのおじいさんは先さきに立たつて、千丈せんじょうガ岳たけを上のぼつ

て行いきました。十丈じじょうくらい長ながさのある、まっくらな岩いわ穴あなの中なかを

くぐつて外そとへ出でますと、さあさあと音おとを立たてて、小ちいさな谷たに川がわの

流ながれている所ところへ出でました。その時ときおじいさんたちはふり向むいて、

「ではこの川がわについてどんどん上のぼつておいでなさい。すると川がわの

ふちに十七八むすめの娘むすめがいますから、その子こにたずねて、鬼おにの岩屋いわやへ

おいでなさい。」

といつたと思おもうと、三人にんともふいと姿すがたが見みえなくなりましました。

みんなはあの三人にんのおじいさんは、住す吉みよしの明み神しょうじんさまと、

熊野くまのの権現ごんげんさまと、男おとこ山やまの八幡はちまんさまが仮かりに姿すがたをお現あらわしに

なつたものであることをはじめて知つて、不思議に思いながら、  
 後ろから手を合わせておがみました。そしてこの通り神さまのあ  
 らたかな加護のある上は、もう鬼を退治したも同然だと心  
 強く思いました。

そこで教わつたとおり川についてどこまでも上つて行きますと、  
 十七八のきれいな娘が、川のふちで血のついた着物を洗いながら、  
 しくしく泣いていました。

頼光はそのそばへ寄つて、

「あなたはだれです。どうしてこんな山の中に一人でいるのです

。」

と聞きました。娘はまたぼろぼろと涙をこぼしながら、

「わたくしは都みやこから、ある晩鬼ばんおににさらわれてこの山の中なかに来たきの  
 でございます。おとうさまやおかあさまや、ばあやたちはどうし  
 ているでしょう。その人たちにも二度どと会うあこともできない身みの  
 上うえになりました。」

といいました。そして、

「あなた方がたはいつたいどうしてこんなところへいらしたのです。  
 ここは鬼おにの岩屋いわやで、これまでよそから人間にんげんの来きたことはありません。  
 せん。」

といいました。頼光らいこうは、そこで、

「いや、わたしたちは天子てんしさまのいいつけで、鬼おにを退治たいじに来きた  
 のだから、安心あんしんしておいでなさい。」

といいきかせますと、娘はたいそうよろこんで、

「それではこの川をまたずんずん上つておいでになりますと、鉄  
 の門があつて、門の両脇に黒鬼と赤鬼が番をしています。  
 門の中にはるりの御殿があつて、その庭には春と夏と秋と冬の景  
 色がいつぱいにつくつてあります。しゆてんどうじはその御殿の  
 中で、夜昼お酒を飲んで、わたくしどもに歌を歌つたり、踊り  
 を踊らせたり、手足をさすらせたりして、あきるとつかまえて、  
 むごたらしく生き血を吸つて、骨と皮ばかりにして捨ててしま  
 います。このとおり今日も、ころされたお友達達の血のついた着物  
 をこうして洗つていますのです。」

といいました。

頼光らいこうは娘むすめを慰なぐさめて、教おしえられたとおりに行いきますと、なるほど  
 大きないかめしい鉄てつの門もんが向むこうに見みえて、黒くろ鬼おにと赤あか鬼おにが番ばん  
 をしていました。門もんに近ちかくなると頼光らいこうたちは、わぎとくたびれ  
 きつたように足をひきずつてあるきながら、こちらから鬼おにに声こえを  
 かけて、

「もしもし、旅たびの者ものでございますが、山道やまみちに迷まよつて、もう疲つかれ  
 て一足あも歩あるかれません。どうぞお情なさけに、しばらくわたくしども  
 を休やすませていただきとうございます。」

と、さも心こころ細ほそそうにいました。

鬼おにどもは、

「これは珍めづらしい者ものがやつて来きたぞ。なにしろ大王だいおう様に申もうし上あげ

よう。」

といつて、酒呑童子の所へ行つてしらせますと、

「それはおもしろい。すぐ奥へとおせ。」

といいました。

六人の武士が縁側に上がつて待つていますと、やがて雷や稲

光がしきりに起こつて、大風のうなるような音がはじめ

ました。すると間もなくそこへ、一丈にもあまろうという大きな

赤鬼が、髪の毛を逆立てて、お皿のような目をぎよろぎよろさ

せながら出て来ました。その姿を一目見ただけで、だれだつてお

どろいて気を失わずにはいられません。けれども頼光はじめ六

人の武士はびくともしないで、酒呑童子の顔をじつと見返して、

ていねいにあいさつをしました。童子はその時おうへいな調子  
で、

「きさまたちはいったいどこから来た。よくこんな山奥まで上  
がって来たものだな。」

といいました。

すると頼光が、

「それはわたくしども山伏のならいで、道のない山奥までも  
踏み分けて修行をいたします。わたくしどもはいったい出羽  
の羽黒山から出ました山伏でございませうが、この間は  
大峰におこもりをしまして、それから都へ出ようとする途中  
道に迷って、このとおりにこちらの御厄介になることになりまし

た。」

「いいました。酒呑童子はそう聞いて、すっかり安心しました。」

「それは気の毒なことだ。まあ、ゆっくり休んで、酒でも飲んで行くがいい。」

「こういうと頼光も、

「それはごちそうです。失礼ではございますが、わたくしどももちょうど酒を持ってまいりましたから、この方も飲んで頂きたいものです。」

「いいました。」

「それはありがたい。それでは酒盛りをはじめようか。」

童子どうじはこういつて、大ぜいの腰こしもと元けらいや家来けらいにいいつけて、酒さけさかなを運はこばせました。酒吞童子しゅてんどうじはそれでもまだ油断ゆだんなく、六人にんの山伏やまぶしを試ためしてみるところで、

「それではまず客きやくじん人ひとたちに、わたしの勧すすめる酒さけを飲のんでもらつて、それからこんどはわたしがごちそうになることにしよう。」

といつて、酒吞童子しゅてんどうじは大きおおな杯さかずきになみなみ人間にんげんの生いき血ちを絞しぼつて入れて、

「さあ、この酒さけを飲のめ。」

といつて、頼光らいこうにさしました。頼光らいこうは困こまつた顔かおもしないで、一息ひといきに飲のみほしてしまいました。それから保昌ほうしょう、次つぎは綱つなと、かわるがわる次つぎから次つぎへ杯さかずきをまわして、おしまいおしまいに酒吞童子しゅてんどうじに

かえ  
返しました。

「酒ばかりではさびしい。さかなも食え。」

酒呑童子はこういつて、こんどは生ま生ましい人間の肉を

出しました。頼光たちはその肉を切つて、さもうまそうに舌

鼓をうちながら食べました。酒呑童子は頼光たちが悪びれ

もしないで、生き血のお酒でも、生ま肉のおさかなでも、引き受

けてくれたので、見るから上機嫌になつて、

「こんどはお前たちの持つて来た酒のごちそうになろうじやない

か。」

といいました。頼光はさつそく綱にいいつけて、さつき神

様から頂いた「神の方便鬼の毒酒」を出して、酒呑童子

のおおさかずき  
 の大杯になみなみとつぎました。酒呑童子はひといきの  
 ほして、これもさもうまそうに舌鼓をうちながら、

「これはうまい酒だ。もう一ぱいくれ。」

と杯を出しました。頼光は心の中ではしめたと思いながら、

うわべは何気ない顔をして、

「どうもお口になつて満足です。それではお酒だけではおさ

びしいでしょうから、こんどはおさかなをいたしましょう。」

といつて、立ち上がつて、扇をつかいながら舞いを舞いました。

四天王は声を合わせて拍子をとりながら、節おもしろく歌を

歌いました。

それを見ると、酒呑童子も、手下の鬼たちも、おもしろそう

に笑いながら、すすめられるままに、「神の方便鬼の毒酒」をぐいぐい引き受けて、いくらでも飲みました。そのうちにだんだんお酒のききめが現れてきて、酒呑童子はじめ鬼どもは、みんなごろごろ酔い倒れて、正体がなくなつてしまいました。

頼光たちは鬼のすつかり倒れたところを見すましますと、笈の中から鎧や兜を出して、しつかり着こみました。そして六人一度に刀をぬいて、酒呑童子の寝ている座敷にとびこみますと、酒呑童子はまるで手足を四方から鉄の鎖でかたくつながれているように、いくじなく寝込んでいました。頼光はすぐ刀をふり上げて酒呑童子の大きな首をごろりと打ち落としてしまいました。酒呑童子の手足はそのまま動けなくなりましたが、切られ

た首くびだけは目をさまして、すつと空そらに飛とび上あがりしました。そしていきなり頼らい光こうをめぐけてかみついて来こようとなりました。けれどかぶとも兜まえたての前まへ立たのきらきらする星ほしの光ひかりにおじけて、ただ口から火を吹ふくばかりで、そばへ近ちか寄よることができません。そのうち頼らい光こうに二三度どつづけて切りきつけられて、首くびはどんと下したにおちてしまいました。

手て下したの鬼おにどもは、しばらくの間あいだはてんでんに鉄てつ棒ぼうをふるつて、打ちうちかかってきました。が、六人にんの武ぶ士しに片かた端はしから切りき立てたられて、みんな殺ころされてしまいました。

鬼おにがおお大おほぜおほいいつかまえておいた娘むすめたちの中には、池田いけだの中ちゆう納な言ごんのお姫ひめさまも交まじまじまっていました。頼らい光こうは鬼おにのかすめた宝たからもの物もの

といっしよに娘たちをつれて、めでたく都へ歸りました。天子さまはたいそうよろこびになつて、頼光はじめ保昌や四天王たちにたくさん御褒美を下さいました。そしてそれから鬼が出て人をさらう心配がなくなりましたから、京都の人たちはたいそうよろこんで、いつまでも頼光や四天王たちの手柄を語り伝えました。

# 青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

※「千丈《せんじょう》ガ岳《たけ》」の「ガ」は底本では小書き。

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 大江山

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>